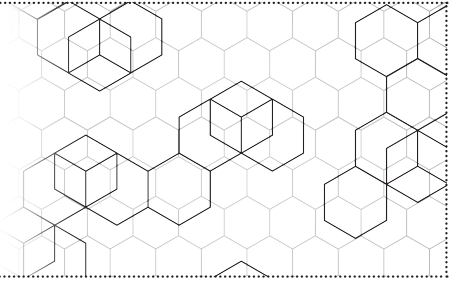


# 真に理論的な統語論の研究は どれくらいあるのか

ノバート・ホーンステイン

折田奈甫・藤井友比呂・小野 創 (編訳)



以前あるところで、言語学は、あるいは少なくとも生成文法は、いまだに文献学的起源から脱し切れていないのではないかと言ったことがある。そこで根拠として挙げたのは、言語学者が言語データを過度に重視することだ。つまり我々の弛まぬ努力にもかかわらず、言語学には真に科学的な精神、すなわち理論的な洞察を研究の中心的目標として認める精神がいまだ宿っていないと思われるのである。結論を端的に述べると、理論統語論には理論がほとんど存在しないかもしれない、ということだ。なぜそうなってしまうのか。私が考えるところでは、我々はいまだ記述主義の悪霊(demon)に取り憑かれているのだ。

統語論の研究は他の科学分野と同じように、次の4つのクラスに分類できるだろう。第1のクラスは現象を記述する研究である①。この研究領域では構文研究が遂行される。その目標は、関係節構文なら関係節構文の、理論を用いた細かい特徴の説明である。物理学であれば、一定の温度の下では気体の体積を小さくすると圧力が増すというような記述と対応するであろう。第2のクラスは、理論を検証する研究である②。①の研究と連動して行われることが多いが、概念的には①とは異なっている。②の研究の目的は、データを用いて理論を洗練、検証することである。統語論における例としては、1980年代中盤に盛んに議論された束縛領域の正しい定義を追い求めるなどの研究が挙げられる。物理学であれば、(最終的には誤っていることが確定した)宇宙はエーテルという物質で満たされているとするエーテル仮説の検証などにあたるだろう。第3のクラスは、一見バラバラに見える一般法則を統合しようとする研究である③。この種の研究では、まずデータ集めの活動があり、次に分析的な活動がくる。古典的な例としては、チョムスキーによるロスの島の効果の再分析である<sup>1,2</sup>。最近の例で言えば、文構造を構築する操作とそれを変換する操作を「併合」という操作のもとで統合するチョムスキーの試みがある。第4のクラスに、理論の基本装置を「単純化し」、概念的に「動機付ける」ことを目的とする研究がある④。反循環的な移動が存在しないことを、移動は樹形図を拡張しなければならないとする拡張原理から導こうとする提案などがこれにあたる。

以上の研究はどれも重要で、中心的な問いの解明に貢献するものである。にもかかわらず、我々の分野では、①、②の研究は疑いの余地のない形で評価されるのに対し、③、④の研究はあまり歓迎しない傾向がある。なぜそうなのか。私の推測を3つ述べよう。

第1に「理論的であること」と「形式的であること」の混同がある。言語学には、言語現象を記述するための独自の技術的・形式的作法がある。言語学者であるためには、この作法を習得しなければならない。しかし、形式的であることは必ずしも理論的であることを意味しない。例えば記述音声学はかなり形式的だが、その目的は理論的ではない。統計学のほとんどや、私見では意味論も同様だ。現在の言語学の事実上全ての研究は形式的だが、上記の③、④のような意味で理論的なものはほとんどないのである。

理論的な研究が評価されない第2の理由は、経験主義と関わる。科学というものは細心の注意を払って事実を発見しその事実を体系化する活動である、という見解が世に流布しているから理論的な研究

が評価されないのだ。経験主義の立場からすると、理論は有用な道具であるが認識論的には2次的な位置付けである。経験主義においては、主たる科学の目的は事実の発見、収集、体系化なのだ。

このような経験主義的思考方と対立するのは合理主義的思考方である。合理主義者にとっては、理論とは観察されたデータの根底にある因果の源を同定するものである。確かにデータはある理論が真と言えそうかを評価するときに役に立つのであるが、理論は(これから見つかるものも含めて)データの要約ではなく、形而上学的レベル(=直接は知覚できないレベル)で世界という部屋がどんな家具で構成されているのかを描き出すものである。

経験主義的な姿勢はもう1つ、言語学においてはお馴染みとも言える態度とマッチする。すなわち、異なる言語の間に観察される際限のない違いに大いなる楽しみを見出す態度である。理論的には、諸言語の根底にある不変の構造に焦点を当てるほうが重要なので、言語の多様性をいったん括弧に入れて考えようとする。自然言語の現象の多様性に心を揺さぶられる人にとっては、このような姿勢は自然言語の諸事実を軽視した非科学的な姿勢に映るのかもしれない。

なぜ理論的な研究があまり見られないのかの3番目の理由は、つい最近まで理論を追求するチャンスがあまりなかったということがあるのかもしれない。理論が出現するのは、統合すべき、あるいは合理的に解釈すべき一般諸法則が存在するときである。個人的な見解だが、生成文法の評価されるべき点の1つは、言語能力の性質を示唆していると考えられる多くの一般法則を発見したことにある。そのような法則群がいったん揃うと、理論が出現する可能性が出てくる。その法則が出揃うまでは、理論が存在するにせよ、それはデータと非常に緊密に結びついているために、経験的データを分析する思索と理論的な思索を区別しようとしてもあまり良い結果は出てこないのである。どういうことか例を用いて説明しよう。

先に触れたチョムスキーによるさまざまな鳥の現象の統合は、ロスによる鳥の現象の記述が概ね正しいことを前提にしている。ロスの提案した種々の一般法則が正しくなくては、それらの現象を統一的に説明する意味がない。しかし、ロスが正しいことを前提とすれば、最も直接的に経験的なデータ(例えば鳥の違反に関する容認度判断)から一步退いて、その一般諸法則がもつ性質の探求にとりかかることができる。別の言い方をしよう。ロスは、自らの一般法則を確立するために第1のレベルである容認度データに焦点を当てた。一方チョムスキーは、ロスの成し遂げたことを前提として、第2のレベルの問いを問うことができたのである。すなわち「種々の鳥に共通した特徴は何か」あるいは「なぜ鳥のようなものが存在するのか」等々の問いである。ロスの研究が概して経験的な動機に駆動されていたのに対し、チョムスキーの研究の関心は、多様な鳥の諸現象をより単純で自然な原理にもとづいて解釈したいという点に主として向けられていたのである。チョムスキーは次のように言う<sup>2</sup>。

鳥の諸制約は、形式文法の一般的で、かなり合理的な計算論的特性の観点から説明可能である。もしこの結論が支持できるならば、それは重要な成果となろう。複合名詞句制約のような条件とwh鳥の制約が独立に存在している事態は非常に不自然で、他に説明を与えるのは困難に思われるからである。

もちろん、良い理論は検証できる新しい予測をもたらすものである。しかしながら、理論の価値は、現象論の拡張だけではなく、説明の点で強く望まれているアイデアを提出する点にあるのである。

さて、ミニマリスト・プログラムの重要な貢献の1つは、直接的な事実から一步か二歩離れたこの種の理論的な研究に価値を求めたことにあると個人的には考える<sup>\*1</sup>。しかし、人々が行っている研究を見ると、どうもそれは特異な考え方であるようだ。私には、ミニマリスト・プログラムの枠組みで行わ

れた膨大な研究の大部分が①と②のカテゴリに入るように見えるし、さらにその多くは、これも個人的な見解であるが、統率束縛理論(脚注1参照)の言葉遣いでも問題なくできたはずの研究であるように見える。それらの研究におけるミニマリズムとは技術的な意味のミニマリズムなのである。(非可視的移动という統率束縛理論の概念を用いず、探索子と標的と一致というミニマリスト・プログラムの概念を用いる、など。)私は、だからこれらの研究がだめだとか、重要性に欠けると言っているのではない。ただ理論的な研究とは言えないのだ。これらの研究は、古い研究スタイルによく見られる、一次的なデータを説明したいという関心によって動機付けられている研究なのだ。

別の言い方をすると、ミニマリスト・プログラムを標榜する研究の中のほんの少数の研究しか、その当初の大きい目標、つまりなぜ我々人間に当の言語能力が備わっていて別の言語能力が備わっていないのかを説明するという目標に取り組んでいない。もっと言うと、以前の統率束縛理論時代においても同様で、当時の中心的論点(学習可能性の問題)に関心を寄せる論文は驚くほど稀だったのである。誤解しないでほしい。私は言語能力の説明や学習可能性の問題が簡単に答えられる問いだとは思っていない。しかしながら、それでも「理論的」と称する研究がこれらの問いに敏感であることがなんと稀なことかと私は驚かざるをえないのである。

では、なぜミニマリズムの枠内ですら理論的な研究が少ないのか。結局のところ、我々は皆、①と②のタイプの研究のやり方はわかっており、さらに言えば、①と②の研究については、どう教え、どう試験し、どう博士学生を指導し、どう論文査読をするかもわかっている。しかし、③と④のタイプの研究については、それがどう重要かを説得する良い方法をまだ私たちが見つけられておらず、それゆえ人々も興味を抱かないのかもしれない。つまり③と④の研究は、まさにその高度な抽象性のゆえに、客を説得しづらい難しい商品だという点が決定的なのではないだろうか。ミニマリズムの真のメッセージは、眼前に見える事象を見ているだけでは不十分だというものだが、このメッセージこそが売りにくい商品であることが常に証明されてきたのである。不幸にも。繰り返しになるが、**上で触れた①～④の研究タイプはすべて価値のあるもので重要である**。記述的な仕事がなければ理論的な仕事は進められない。しかしそれでもなお、理論的な研究は特異な存在だ。初期ミニマリズムで期待された、研究活動をより理論的方向に向けさせたいという希望が実現したかという、そうとは言い難いと個人的には思うのである。

(翻訳：藤井友比呂)

#### 文献

1—J. R. Ross: Constraints on variables in syntax. 博士論文, マサチューセッツ工科大学(1967)

2—N. Chomsky: in *Formal Syntax*. P. Culicover et al. eds., Academic Press(1977) pp. 71-132

#### 【指定討論】

### 真に理論的な統語論の研究は可能か？

窪田悠介

多士済々な顔ぶれの本連載を毎回興味深く読んでいたところ、思いがけず企画立案者の折田奈甫氏から今回の指定討論者にご指名いただいた。一も二もなく

引き受けたものの、指定されたホーンステインの記事を一読して、私ははたと考えてしまった。私は統語論の研究者でありながら生成文法の「メインストリーム」の研究に対して一貫して批判的な立場を表明してきた<sup>1,2</sup>ので指名にあずかったのだろうが、本記事のホーンステインの主張の眼目に関しては、特に反論したいことが何もないのである。それどころか、(科学)理論とは何かについて正鵠を射た解説をしており、ぜひ

\*1—1980年代の理論的枠組みであった統率束縛理論において、生成文法は非常に記述力を増した。その後1990年代前半に、ミニマリスト・プログラム(ミニマリズム、極小主義とも呼ばれる)が提案され、統率束縛理論の道具立てのうち「概念的必然性」をもたない仮定を廃棄し、理論を簡素化することが目指された。

学生に薦めたいとすら思ったほどである。一方で、要所所にホーンステイン自身の思想が色濃くにじみ出ており、また、意図的かどうかは不明だが、生成文法研究を肯定的に描き出す目的にとって都合の悪い事実は一切語られていない。その意味で、前提知識や背景の研究史の事情を知らない学生や分野外の研究者に対して決して手離しに薦めるわけにはいかない代物であると思ったのもまた事実である。そこで、以下では主に学生や分野外の研究者を念頭に置き、この記事を読む際の注意点を私なりの立場から説明することを主な趣旨として議論を進めてみたい。

先に結論を述べると、ホーンステインの「言語能力の説明や学習可能性の問題が簡単に答えられる問いだとは思っていない」という見解に私は同意する。そして私は、それゆえ、つまり、この点について深く同意するがゆえに、「個人的な見解だが、生成文法の評価されるべき点の1つは、言語能力の性質を示唆していると考えられる多くの一般法則を発見したことにある」といった言明に見え隠れする、現在までの生成文法の研究実践に対するホーンステインの過度に好意的な評価に、残念ながら賛同することができない。私は、現在までの生成統語論研究は、おしなべて、記述的な研究から理論的な研究への移行に関して性急でありすぎたために、そして、統語論の理論の内部で解決すべき問題が何かということに関する精査を十分に行わないまま抽象的な理論構築の作業に偏重しすぎたために、真の意味で説明力が高い理論を構築する試みにおいて失敗しつづけてきたと考えている。このことを、ホーンステイン自身が例として挙げている、チョムスキーによる島の制約の「下接の条件」による統合を例にとって具体的に考えてみたい。

藤井友比呂氏の要領を得た解説から明らかなように、生成文法の一般的な立場においては、島の制約に違反する文(藤井解説の(3)や(4)など)は統語論の原理によってその不適格さが説明される、非文法的な文であるとされる。ホーンステインは注意深く、「チョムスキーによるさまざまな島の現象の統合は、ロスによる島の現象の記述が概ね正しいことを前提にしている」と一言断ってから議論を進めている。読者には、この何気ない留保が、改めて指摘する必要がないほどに当

たり前の、科学研究におけるごく基本的な方法論的前提である点に、ここで十分に注意を払っていただきたい。そもそもデータの一般化に問題があれば、その一般化を前提として構築されたより高次の理論は、いかに魅力的だったとしても、所詮は経験的な根拠が危うい、いわば砂上の楼閣にしかかなりえないからである。

ホーンステイン自身は2014年に書かれたこの記事の中でまったく触れていないが、この一般化が果たして妥当であるかというまさしくその点が、少なくとも1990年代以降、統語論研究において大きな論争的となっている<sup>3</sup>。ここではわかりやすい例として、ロバート・クルンダーによる、関係節からの抜き出しのケースに関する、非統語的な代案による説明を紹介したい(以下の内容は文献1の一部を編集して再掲したものである)。

クルンダー<sup>4</sup>は、(1)のタイプの関係節からの抜き出しに関する島の制約について、「指示性」という意味論的・語用論的要因を段階的に変化させることで容認度が段階的に変化することを指摘した。(1a)が最も容認度が低く、(1d)が最も容認度が高い。

- (1) a. What do you need to find the professor [who can translate \_\_\_]?
- b. What do you need to find a professor [who can translate \_\_\_]?
- c. What do you need to find someone [who can translate \_\_\_]?
- d. Which article do you need to find someone [who can translate \_\_\_]?

「指示性」とは、「指示対象を同定するためにどれだけ具体的内実を伴った言語表現が用いられているか」という、文脈における意味解釈に関わる要因であると理解しておけばここでの議論にとっては十分である。(1a)から(1d)に向かうに従って、抜き出しの「通り道」にある名詞句(the professor>a professor>someone)が指示性が低いものになり、一方、抜き出される名詞句自体は指示性が高くなる(what<which article)方向に例文が作られている。どの例文も、構造的には関係節からwh句が抜き出されている点で島の制約に違反していることにおいては変わらない。

クルーナーの考察の重要な点は、単に(1)のデータを示したのみならず、この現象が、一般に狭義の文法ではなく文処理の問題と考えられている、中央埋め込み構文における容認性の段階的な変化と並行的であることを明確に指摘した点である。(2)に中央埋め込みの例を示す(ここでも(2a)から(2e)に行くに従って容認性が上がる)。

- (2) a. The woman [the man [the host knew \_\_\_] brought \_\_\_] left.
- b. The woman [that man [the host knew \_\_\_] brought \_\_\_] left.
- c. The woman [a man [the host knew \_\_\_] brought \_\_\_] left.
- d. The woman [someone [the host knew \_\_\_] brought \_\_\_] left.
- e. The woman [someone [he knew \_\_\_] brought \_\_\_] left.

この並行性をもとに、クルーナーは、(2)の中央埋め込みの容認度の説明のために独立に必要となる、人間の脳内での逐次的な文処理における負荷に関する仮定を立てれば、関係節からの抜き出しのタイプの島の制約に関しても、全く同じ仮定により(1)に示した段階的な容認度の変化を説明できると主張している。この代案により(1)のデータを説明できるならば、関係節からの抜き出しに関する島の制約に関して、統語的な制約を立てる必要はなくなる。

ここでは詳細に立ち入る余裕がないが(文献3,5参照)、他の島の制約についても、語用論、意味論、音韻論的条件など、統語論とは別の要因によって説明できる可能性が様々な研究者によって指摘されている。このことの帰結は極めて重大である。ここでとりわけ注意していただきたいのは、これらの研究によって提示された島の制約の説明に関する代案は、単に統語的アプローチも非統語的アプローチもどちらもありうるという両論併記的、ないし微温的な立場を是認するようなものではなく、ホーンステインが正しいと仮定している、生成文法において伝統的に取られてきた統語的アプローチの存立基盤を大きく脅かす意味合いをもつものであるという点である。この点を理解するため

には、上でその重要性を強調した、ホーンステイン自身が認めている留保から何が帰結するかを正確に把握する必要があるので、くどいようだがここでこの点をもう一度振り返ってみよう。仮に、島の制約が、本来的に雑多でありそれぞれ別個の説明を与えられるべき現象を、一般化の整理の段階で理論家が誤って一つの現象群としてまとめたものにすぎないとすると、そもそもこれらの現象を言語の構造に関する抽象的な生得的知識の体系に関する統一的な原理によって「説明」する必要はなくなるのである。

島の制約は、一見したところ意味や世界知識とは無関係の、純粹に文の構造に関わる抽象的かつ自明でない知識のように見えるので、生成文法の合理主義的な言語観、そしてそれと表裏一体の言語知識の生得主義の立場を支える有力な経験的証拠の代表例として、繰り返し用いられてきた(この論法はあまりにも有名なので、他分野の研究者による議論(文献6など)にも登場することがある)。1990年代以降の一連の島の制約の再検討は、要するに、この手垢が付くまでに使い古された論法が、もはや無条件には正当化できないことを示しているのである。

さて、上のような指摘に対しては、生成文法陣営から、そのような批判は学問的成果の内容については正しいかもしれないが、科学研究の実践に対する評価としては歴史の後知恵による難癖ではないか、という応答が想定できる。「誤謬」や「失敗」に対して過度に不寛容な態度を取ると理論的に重要な仕事の芽を潰す恐れがあるからだ(私自身は、藤井氏の解説をそのような立場の表明として読んだ)。理論研究は、その性質上、そもそもが事実観察のレベルの研究を前提とせざるをえない。ならば、理論研究者の仕事に対して記述的一般化のレベルで難癖をつけるのはそもそも筋違い、というわけである。私としては、そのような応答は、生成文法研究の目的が人間の言語能力の解明である限りにおいて、ある種の看過できない責任放棄を伴うものであると言わざるをえないと考えている。理由は二点ある。一点目は、「島の制約が統語的な制約か」という問い自体は、決して1990年代以降突如現れた新しい考え方ではないという点である。二点目は、自然言語が抽象的な構造をもった記号体系により複雑な意味を表す

媒体であることを考えると、理論の簡潔さを求める営みは、(言語の構造的側面に関わる)統語部門だけでなく、体系全体の振る舞いを考慮に入れて進める必要がある点である。

まず一点目について。確かにチョムスキーが「下接の条件」を提案した1970年代においては、島の制約に例外が見られるという事実はそれほど広く受け入れられておらず、ロスの一般化は統語論の内部で説明すべき現象だという見方が支配的だったのは事実だろう。だが、これ自体、研究コミュニティ内部のバイアス以外の何物でもない。島の制約の少なくとも一部(等位接続構造制約の片方)については、ロス自身が1967年の博士論文の中ですでに反例の存在を指摘している(このことは統語論の専門家の間では周知の事実である)。また、島の制約への非統語的な説明の先駆的なものは1970年代後半から1980年代の初頭にはすでに出版された論文の形で出てきている(文献3を参照)。

二点目について。私見では、生成文法の現在までの研究の最良の成果は、いずれも、「言語能力の性質を示唆していると考えられる多くの一般法則」の候補として提示されたもののうち、どれが真の意味でそのような一般法則であるかという点に関する、長期間にわたる激しい論争の結果もたらされてきた。そして、その論争の当事者たちは、理論研究と記述研究が未だ未分化である混沌とした状況において、二つの領域を行きつ戻りつしながら、手探りで統語論を含む言語の理論全体の最適な形を徐々に洗練させてきたのである。私は、現在まで曲がりなりにもこの論争の一部に参加

してきた一研究者として、この事実を軽視してはならないと感じている。抽象的な構造に関する統一的な理論を追求することの誘惑は確かに抗いがたい。しかしながら、我々は良くも悪くも今なお記述主義の「鬼(demon)」に取り憑かれているのである。その「鬼」を追い払うのではなく、うまく手なずけることによつてのみ、理論研究の進展への道が開けると私は考えている。

#### 文献

- 1—窪田悠介:『基礎日本語学』。衣畑智秀編、ひつじ書房(2019)pp. 260-282
- 2—窪田悠介: kotoba, 2023 年秋号, 176(2023)
- 3—F. J. Newmeyer: Annual Review of Linguistics, 2, 187(2016)
- 4—R. Kluender: in *Island Constraints: Theory, Acquisition and Processing*. H. Goodluck & M. Rochemont eds., Kluwer(1992)pp. 223-258
- 5—R. P. Chaves & M. T. Putnam: *Unbounded Dependency Constructions: Theoretical and Experimental Perspectives*. Oxford University Press(2020)
- 6—次田瞬:『人間本性を哲学する』。青土社(2021)

**追記:** 理論研究における典型的な議論の応酬を読者に疑似体験していただくため、藤井解説の後半部で提示されている例文について一言だけ付記しておく。藤井氏が指摘するように、現状の文処理説では「介在要素」の定義が不明確なため、(5)のような例について統語説との十分な比較ができない。私見では「関係節の被修飾名詞句であるか」という点で(5)と(6)では「介在要素」のステータスが異なる点が重要ではないかと考えている。この点を詰めて仮説をより精緻にすることは今後の課題である。

#### 解説

##### 藤井友比呂

今回とりあげたホーンステインの記事は「理論」についてのものである。記事は統語論分野(語をどう組み合わせる文を作るかについての研究)の専門知識を前提に書かれており、分野外からの読者にとってはやや敷居が高い内容になっていよう。しかしながら、本記事の背後には、現代言語学は何を目標にすべきかという極めて基盤的な問いが控えている点で非常に重要であるように思われ、本連載で取り上げることとなった。編訳にあたっては記

事原文にある技術的な話題の多くを省略し、最小限の内容を解説に切り出して説明を与えたことを断っておく。以下ではまず記事の解説を行ったのち、いわば「敵陣」に乗り込み討論を行うことを快諾いただいた窪田悠介氏による批判を吟味したい。ホーンステイン記事と窪田論考の立ち位置を確認しておく、ホーンステインが、窪田氏のことばでいうところの「メインストリーム」の生成文法の研究史を論じているのに対し(以下ではカッコ付きで「主流派」と呼ぶ)、窪田氏は、その「主流派」の研究史観に異議を唱えているのである。

記事の中でホーンステインは、科学においては理論が主でデータが従であるべきだと訴える。氏が問題にした

いことは、理論統語論の研究者は理論、理論と言うが、実情は言語事実の形式化、体系化にばかり関心がもたれていて、一般法則の統合など真に理論的な研究は残念ながら稀であった、その原因は何か、ということである。生成文法は通常、合理主義的で反経験主義的であると見做されているが、氏は、その常識とは異なりこの分野の研究者に経験主義的なデータ重視の姿勢があると言う。また、理論的な研究はその高度な抽象性によって「買ってもらいにくい」商品になっているとも言う。この主張の具体的なイメージをもつために、理論的な研究の好例として挙げられている「ロスの島のチョムスキーによる統合」について最小限の説明を与える。

英語にはwh移動という現象がある。who(誰)、what(何)、where(どこで)などのwh句(疑問詞)は、文の先頭に「移動」しなくてはならない。下の平叙文(1a)においてJohnは動詞sawの直後にある目的語だが、who疑問文を作るさいは、Johnをwhoに変え、文頭に前置する。(1b)がそうしてできあがったwh疑問文である。(didが必要なことはここではあまり重要ではない。)矢印でwh句が文中の位置から文頭の着地点に移動したことを示し、その「元の位置」を\_で示すことにする。

- (1) a. You saw John.  
 b. Who did you see \_?
- 

wh移動の1つの特徴はその非有界性である。越えられる節境界の数に制限はない。(1b)では単一の節の中でwh移動が起こっているが、(2)では従属節境界を1つ越えて移動が起こっている。英文中の節境界と日本語訳中で対応する節境界を[ ]で示す。

- (2) Who did Bill say [従属節 that you saw \_]?
- 
- (訳：ビルは[あなたが誰を見たと言いましたか。])

さらには2つの従属節境界を越えているように見えるWho did you think [that Bill said [that you saw \_]]?のような文も可能である。

ロスが自身の博士論文(1967年)で指摘したのは、wh移動が常に非有界的なわけではないということだ。(3)と(4)をご覧いただきたい。(実はロスは(4)の構文はほとんど議論していないが、後述するチョムスキーの下接の条件が説明の対象にするので本解説に含める。)

- (3) \*Who did you meet someone [関係節 who saw \_]?
- 

(意図されている意味：あなたは[誰を見た]人に会ったのですか。)

- (4) \*Who do you wonder [間接疑問節 who saw \_]?
- 

(意図されている意味：あなたが[誰がその人に会ったのか]疑問に思っている、その人とは誰ですか。)

各例の意図を踏まえると、これらの文は複雑ではあるが伝えたい意味をもっていることがわかる。どちらも例えばJohnのような答えを与えることができる疑問を表している。しかし、(3)も(4)も母語話者が非文法的と感じる文で(慣習に沿って文頭の[\*]の記号でそれを表す)、移動の経路に関係節の境界や間接疑問節の境界を含んでいる。ロスは、このようにwh句が「脱出」できない領域が英語にあることを指摘し、「島(island)」と呼んだ。島の中からのwh移動は許されない、というわけである。島にならない(2)のthat節との対比が重要である。

チョムスキーは1973年に下接の条件(subadjacency condition)を提唱し、wh移動を妨げる種々の環境をこの統一的条件の違反としてまとめようとした。関係節付きの名詞句と間接疑問節が抽象的なレベルで自然類をなすように定式化されたのである。ホーンステイン記事はロス論文の目標とチョムスキー論文の目標が異なっていることを強調する。すなわち、前者が(2)~(4)のようなデータ、つまりどの構文タイプがどんな容認度をもつかを捉えようとしたのに対し、後者はなぜ関係節や間接疑問節が島になるのかを理解すべく「直接的な経験的データから一歩距離をとった」研究であったということだ。これが窪田論者の議論の対象でもある「ロスの観察を正しいものと仮定する」ということに他ならない。

ホーンステイン記事は、記述的な研究に比べて理論的な研究が「買ってもらいにくい」商品であり、それは残念なことであるという認識を示している。これに関連してすぐに頭に浮かんだのは、この記事で触れられていないホーンステイン自身による2つの論考である<sup>1,2</sup>。どちらの論考も、ある文法プロセスXを別のプロセスYに統合し、Xの廃棄が可能だという統合の論理を取る。どちらも学術誌上で熱い論争を巻き起こしたが、私見では(2つのケースで程度の違いはあれ)人々の関心は統合にどのような反例があるかに集まり、Xが存在するならば文法的に珍種と言わざるを得ない<sup>1</sup>とか、XとYを理論で別立てにするには性質が似すぎではないか<sup>2</sup>といった記述を超えた理論的な「憂慮」がどれほど広く共感を得られたかは明らかではない。いずれにせよ、ホーンステインの研究史認識は、惜しまれることに記述的研究ほど

は理論的な研究は進まなかった、ということになる。

さて、以上の解説の原稿を窪田氏にお見せし指定討論をお願いしたところ、窪田氏からは、生成文法「主流派」の理論的な研究は、いわば不十分な観察を理論化しようとする砂上の楼閣であるとする、内容に富む一貫性のある批判が届いた。窪田氏の立場では、砂上の楼閣の例がまさに下接の条件であり、問題の制約は文処理の問題、つまり文解析器の作業記憶能力の問題に還元されるとする論説が以前からあるにもかかわらず、記事はそれを無視していると警鐘を鳴らす。

窪田氏の批判に対する私の所感を述べたい。まずホーンステインの議論がロスの記述・下接の条件が概ね正しいことを前提としているという点について。この点の私の受け止め方は窪田氏と少し違っている。私の読み方では、下接の条件はたとえそれが経験的に誤っていると示されたとしても、統合とはいかなる活動なのかを例示してくれる、研究史上の好例であると考えている。

しかしながらそれだけでは、有力な非統語的な仮説に向き合えないのは責任放棄であるという窪田氏の主張への返事にはならないであろうから、以下では文処理の素人なりにクルーナーの考え方(すなわち、(3)や(4)の悪さは、関係節や間接疑問節がもたらす文法上の問題によるのではなく、指示性の高い名詞句がもたらす作業記憶への負荷によるという考え方)に向き合ってみたい。(専門家による論争は窪田論考文献3に引用されている文献を参照されたい。)まず気になったことは、文処理説で伝統的な鳥の効果は一体どう説明されるのかということである。(5)の例を作ってみた。(5)はthat節を含み、(6)は窪田論考の(1a-c)で関係節を含んだ例である。(母語話者調査を行っていないが)ロスの一般化のもとでは例えば(5a)は(6a)より容認度が上がると推測されるが、これに関して文処理説はどんな論理でどんな予測をするのであろうか。

(5) What do you need to show [従属節 that {a. the professor, b. a professor, c. someone} can translate \_\_\_]? (訳: あなたは[教授がある人が何を翻訳できることを]示す必要があるのですか。)

(6) What do you need to find {a. the professor, b. a professor, c. someone} [関係節 who can translate \_\_\_]? (訳: あなたは[何を翻訳できる]教授/人を探す必要があるのですか。)

さらに興味を惹かれるのが、(5a-c)は((6)の場合と同様に)aからcの順で容認度が高まるのかどうかだ。事実も気になるが、文処理説がどのような予測をするかは

もっと気になるところである。説では節境界の周囲の名詞句が「介在要素」になることが示唆されているが、厳密な定義は何であろうか。そして(5)の従属節主語はその定義を満たすのであろうか。(窪田論考の中央埋め込みの例では従属節主語は介在要素になっている。)定義を満たすのであれば(5)は(6)と同じように振る舞いと予測され、満たさないのであれば(5a-c)には差はないと予測されよう。これらの問いは全て、文処理説において文解析器は単語列に具体的にどのような表示を与えて依存関係を構築していると仮定されているのか、その際に厳密にどの位置の要素が(指示性が高ければ)作業記憶に負荷をかけ、どの位置の要素はかけないと仮定されているのか、そしてその区別は何に起因すると考えられているのかといった基礎的な仮定に関わる問いに繋がっている。クルーナーの論考には(5)のタイプの文に関する議論は見つけられなかったが、このような例について正しい予測をしないのであれば、統語説より優れているかどうかは明らかではないであろう。そして、統語説にとって都合の悪い観察を提出することだけが文処理説の目的ではないであろうから、上記のような基礎的な仮定を明示的に述べてはじめて統語説の代案になるのではないかと窪田論考に回答してもアンフェアではなからう。

#### 文献

- 1—N. Hornstein: Linguistic Inquiry, 25(3), 455(1994)
- 2—N. Hornstein: Linguistic Inquiry, 30(1), 69(1999)

タイトル画像クレジット: vladystock/123RF

\* 今回は大規模言語モデルをテーマにした番外編を8月号に掲載する予定です。

#### ノバート・ホーンステイン

Norbert Hornstein  
メリーランド大学言語学科名誉教授(生成文法・統語論)

#### 折田奈甫 おりた なほ

早稲田大学理工学術院英語教育センター准教授  
(第一言語獲得・心理言語学)

#### 藤井友比呂 ふじい ともひろ

横浜国立大学大学院環境情報研究院教授(統語論)

#### 小野 創 おの はじめ

津田塾大学学芸学部教授(文処理・心理言語学)

#### 窪田悠介 くぼた ゆうすけ

国立国語研究所准教授(統語論・意味論)

How much THEORETICAL work is there in syntax?  
Norbert Hornstein (January 14, 2014)

<https://facultyoflanguage.blogspot.com/2014/01/how-much-theoretical-work-is-there-in.html>